Osaka University Knowledge Archive

Title	蒔絵アルバム(横浜写真)
Author(s)	相磯, 洋一
Citation	デザイン理論. 1996, 35, p. 88-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52894
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

蒔絵アルバム（横浜写真）

相磯洋一／安田女子短期大学・京都市立芸術大学

安政6（1859）年の横浜開港に伴い外国人居留地ができ，公私用とも来日する外国人が多くなった。極東の辺地を訪れた彼らは，冒険心と故国から遠く離れた自由を楽しみつつ，日本各地の風景や史跡のほか，風俗や習慣，さらには日本女性などに東洋的異国情緒を求めた。離日に際しては帰国後の話題や家族や知己へのみやげのため，それらの情景を多数収めた高価な写真アルバムを競って求めた。

しかしすでに文明開化による生活様式の変化で，彼らが思い描いていたような日本の伝統的情景は，急速に無くなりつつあった。

従って，写真師たちは，未熟な撮影技術と，極めてロケには不向きな湿板写真をもって地方にそれらを求めたり，にわか仕立てのモデルによる涙ぐましいばかりの演出写真を撮ることになった。

これらの努力によってか，アルバムは大変な人気を得て，明治の初めから中ごろにかけては横浜の地場産業にまで発展し，輸出も盛んに行われるようになった。

開港横浜の風俗などを錦絵にして外人向け土産物とした横浜絵と同様「横浜写真」と呼ばれるが，当時外国人の間では表紙の豪華な蒔絵から「MAKIE ALBUM」として親しまれた。

「蒔絵アルバム」は，その性格からほとんどが外国に流出，日本人の目にはふれる機会も少ないまま130年が経過し，経年による重さによってか近年話題になりつつあるが，ともすれば一瞥されがちなこれらの写真に，当時の稚拙な技術で写真師とモデルが外国人の好みを想像して，なりふり構わず演じる姿に興味以外の何かを感じ取りたい思いがする。

発明から約30年を経て撮影技術，機材・プロセスともにある程度の安定を見るに至った写真は，遠隔地の情景を伝達する手段としては，従来の絵画を凌駕しつつあったが，イメージ描写や動的な報道などでは画家の表現力がはるかに勝っているため，用途に応じてパラレルな状況にあったようだ。

文久3（1863）年，報道写真家ベアトが報道画家ワーグマンと来日し，横浜の外国人居留地に会社を設立，長年の鎖国により温存されていた江戸時代の風景，建造物，風俗，人物，事件などを異国人の目で驚異と興味をもって精力的に撮影し，海外に報道した。また知己となった高級外国人には，帰国時の格好の土産物としてそれらの写真を販売するようにもなり，次第に種板の数も増していった。

「患者の脈をとる医者」F・ベアト　アサヒカメラ1987年4月号より

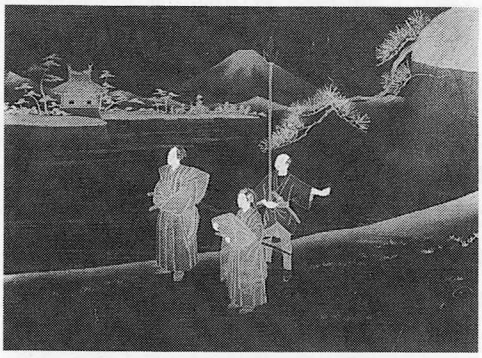
また明治元（1868）年に来日したオーストリア出身のスティルフリードは，北海道開拓使に雇われて施設を撮影する傍ら，北海道の風景やアイヌに興味をもって写真に収めていった。明治9（1877）年にはベアトの機材，種板などすべてを引き継いで「日本写真社」を設立し，「横浜写真」を専門に販売した。

日本人も外国人写真家の助手をつとめたりして技術を習得した数人が同じように活動を開始，制作・販売体制を作っていった。

当時はまだ湿板写真の時代で，太陽光線によって鶏卵紙に焼き付け複数生産を行った。更に付加価値をつけるため，廃藩により職を失った元お抱え絵師たちに一枚一枚細密美麗な彩色や，撮影が極めて困難な遠景の富士山などの描き起こしを行わせた。もともと基礎技術の確かな職人によっての作業は，新たに写真の人着（人工着色）技術を生むほどになり，後の色彩印刷への基にもなった。

これらのアルバムには，100枚ほどの日本各地の名勝や風俗，春夏秋冬の景色や日常的な生活，農作業，礼儀作法，日本人の一生などの，ある程度のストーリーを持った写真を貼りつけた。

また絵師同様に藩からの注文が無くなった漆職人たちによって，蒔絵や螺伝が施された豪華な表紙，裏表紙を用いて装丁されていた。



蒔絵アルバムの表紙　Die bibliophilen Tashenbücher より

当時の外国高官や豪華船による旅行者にとって『完全版日本アルバム』の価格200ドル（明治前期の邦貨に換算して300円）の価値を今計ることは難しいが，帰国後の話題をにぎわし，豪奢を誇るためのマテリアルとして奮発するには，その価格をも含めて適当なものであったのかもしれない。

ベアトを初めとする外国人写真家とは別に，明治維新前後の横浜では下岡蓮杖，内田九一，清水東谷らが営業写真館を開業していて，特に下岡蓮杖はロンドンの雑誌にも紹介されるほどの「全楽堂・相影楼」という写真店で本業の傍ら，外国人向けの浮世絵や土産写真を手がけていたが，これが初期の横浜写真に当たるのではないかと思われる。

これらの写真師がいずれも東京に移ってから後の明治10年ごろ，ベアトの助手を務めていた日下部金兵衛が横浜に「金弊商会」を設立『金幣アルバム』と称して手広く販売，明治16年にスティルフリードの「日本写真社」を引き継いだファサリが「ファサリ商会」を設立して，双璧としてアルバムの制作販売を行い，明治20～30年には横浜の地場産業にまで発展した。当時の「ファサリ商会」では常時10～13人の絵師を抱え，印画の着彩を行っていたようである。

また，玉村康三郎は，これらを輸出産業にまで発展させ，明治の中ごろには米国に営業マンを派遣して100万枚の注文を取ったといわれている。

写真の黎明期に，日本で特異な発展をした商業性の強いこれらの写真を当時の日本の自画像に見立てて，わずかな視角から背景を綴り合わせ，透視する楽しみを味わいたい。

『横浜写真』は，写真史ご専門の小沢健志氏によって昭和30年ごろ名づけられてから定着した。さらに絵葉書の原型としても位置づけておられる。

また日本写真協会の井上光郎氏（JCII フォトサロン）にご協力いただいた。